

結ぶ 寺井美奈子

ここに赤と白の二本の紐があるとす。これを結ぶためには、「俺は赤だ」「俺は白だ」とつっぱっては結ぶことができない。結ぶための何センチかの部分で、赤は白を受けとめ、白は赤を受けとめて、はじめて蝶結びなり花結びなりができれば、

人と人との結びつきをつくっていく場合でも、お互いがまず相手を受けとめるだけの余裕のないところには、つっぱり合いがあるだけである。〈結ぶ〉ということの前提には、まず相手を受けとめるまで受けとめるということが、どうしても必要になってくる。「わからない子だ」「悪い子だ」「こまっちゃうくれた子だ」などと頭から決めつけてしまうのが一番いけない。決めつけてしまうのは、おとながつっぱっているのであり、子どものほうにもそれなりの言い分があり、それがうまく表現できないために、つっぱってしまうのである。そうした子どもにたいして、おとなまでがつっぱってしまえば、もはや〈結ぶ〉ことなどできるわけもない。自閉症、または自閉症ぎみの子どもが増えつつあるのも、つ

っぱっているおとなが増えているあおりなのであり、子どもは恐ろしいほどに、周囲のおとなの心理状態までも受け継いでしまう。そしてそのことが、その子の性格をつくっていくのである。子どもは子どもなりに、たとえどんなことであれ、自分のできることをしたいという欲求をもっている。ひとつの状況のなかで、自分のやれることは何なのか、ということを見ており、それをするこゝによつて、人間の仲間に加わりたいという気持は本源的なものである。ときにはそれが見当違いのことはあるけれど、仲間入りしたい気持に変わりはない。

弟の小さい子どもが来るたびに、母が急いで仏壇をしめていたのだが、四歳になるころから時々忘れると、やってくる早々、自分で仏壇をしめはじめた。かの女にとって、仏壇はしめるものであり、それをしていないのを見ると、その役をはたさそうとするのである。そのとき、かの女のすることを禁ずることは簡単だが、その行為をまず受けとめて、一緒にしめることで仏具が決してオモチャではないこともおぼえてきた。何しろ仏壇のなかには子どもの好奇心をさそうオモチャになりそうなものが沢山ある。しかし、それはおばあちゃんの大事なものであり、それぞれの人の大事なものは、勝手に持ち出してはいけないことを、少しずつ理解できるようになった。いまでは聞いていれば、「しめないの」

と聞くようになり、「今日は開けておきましょう」と答えることで、納得するようになってきた。

もし最初に「いたずらするんじゃないやあせせん」と頭から叱ったならば、そこでおばあちゃんとの結びつきはできなかったろう。

もちろんそれだけが二人の結びつきのすべてではない。しかし、そうすることによってひとつの〈結び〉ができたのである。これはあくまで一例であり、いろいろな状況のなかで、具体的にいくつもの〈結び〉をつくっていくことによって、おばあちゃんと孫のあいだに人と人との結びつきがつくられていく。

人と人との〈結び〉は、ひとつひとつの具体的な事例の積みかさねをすることによってできていくものであり、いくらおばあちゃんが孫を可愛いと思っても、まず相手を受けとめる、という態度なしには、いつまでたってもおばあちゃんの片思いに終わってしまう。わたし自身、病気で寝ていたため、何ひとつしてもらうことのなかった父方の祖母が好きだったのは、ほとんど小言がなかったためである。その反対に二言目には小言がとんできた母方の祖母は最後まで馴染めなかった。

おとなが子どもを受けとめていくということは、何でも「いいよ」「いいよ」と言うなりに、子どもの欲求を通してやることではない。何にも知らぬ白紙状態で生まれてくる子どもには、ひと

つひとつ教えて教育していかなければならない。しかし、その教えるというおとなそのものを子どもが好きにならない限り、何かをおぼえるということ以前に、おとなそのものを拒否して、つっぱねてしまうのである。そのため、最初にまずおとなが子どもありのままに受けとめ〈結び〉をつくる必要があるであり、教育というのは、それからはじまる。
(評論家)

むすぶ 中本愛子

編集部から「むすぶ」というテーマを頂いた時、ふと以前経験した一つの事を思い出しましたので、感じたままを記してみたいと思います。

ある時、年長児男女数名とビーズでくびかざりとか、うでわ、ゆびわなどを作ったことがありました。絹針に糸を通し最後に結びをつくるどころ迄は私が――、あとは子どもたちが自由に好みの長さにビーズを通し、両はしを結んで出来上りです。

中でもA君は妹に作ってあげるんだとはり切って、たんねんに